
ビジネスセミナー

和泉あらた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ビジネスセミナー

【Nコード】

N9966M

【作者名】

和泉あらた

【あらすじ】

人と仲良くなるには、共通の敵を作るのが一番早い気がする。

この小説には人によつては不快にさせる表現などがあるかも知れませんが、苦手な方は、夏のホラー2010にも投稿した『幼き日の殺人計画日記』という短編があるので、そちらを読んで頂けると嬉しいです。

ブログ

ビジネスセミナー「集団コミュニケーション力を磨く」【開催のお知らせ】

お世話になっております。

いつも弊社セミナーをご利用頂きありがとうございます。

このメールは、弊社セミナーにお申し込みやご参加をして頂いたことのある企業様、及び名刺交換をさせて頂いた事のある担当者にご案内させて頂いております。

今後のご案内がご不要の方は、お手数ですが本メールにご返信くだされば、配信停止の手続きを致します。

「集団行動」「コミュニケーション」、それはどの企業様やどの担当部署に置いても必要不可欠なビジネスツールです。

本セミナーは、今までご要望の多かった「集団コミュニケーション力の磨き方」を基礎から実践研修を通し、高めていくことを目的とします。

チーム内に、集団コミュニケーションを苦手とする方はいませんか？

集団行動やコミュニケーション力の欠如は恥ずかしく感じることはありません。

なぜ集団コミュニケーション力が必要なのか、それをどうやって最大限仕事に生かしていくか。

本セミナーでは、ただの馴れ合いではなく、より良いビジネスパートナーを育てるためのビジネスツールとして活用頂ければ幸いです。今回は、若手育成を目的とした内容となっているため、三十歳以下の方を限定とさせて頂きます。

管理者、役員のためのビジネスセミナーはこちら↓【第十五回管理者向けセミナー】嫌われることを恐がらないの意味】【第七回役員向けセミナー】得意不得意を見抜いて狡猾なチーム編成を】近日開催予定です。詳細は弊社HPからご確認下さい。

「集団コミュニケーション力を磨く」

講師：様々な企業でコミュニケーション力を培った弊社担当者三名
がお手伝いします。

場所：弊社第三会議室

費用：有料 全12回六万円（弊社他セミナーにご参加中の企業様は割引が利きます。詳しくは営業担当までお問い合わせ下さい。）

開催日：毎週水曜日、A10：00～、B15：00～、C19：00～（ABCいずれかひとつをお選び下さい。開催中の参加者及び時間帯の途中変更及び振替はできません。御了承ください。）

定員：各時間五名まで（多数応募の場合は抽選となります。また大幅な定員割れの場合は、他の時間に振替をお願いする場合があります。）

プログラム：なぜ今集団行動が必要なのか？

コミュニケーション力をビジネスに生かす。

チームで必要とされるビジネスパーソンになるために。

などを座学で学んだあと、実践研修に入ります。

1・拔擢

集団行動が苦手。

それは昔から変わらない。

思い返してみれば、物心ついた頃から変わっていないのかもしれない。

僕自身は諦めて、なるべく逃げる様に生きてきた。

部活もサッカーや野球など一通りためして見たけれど全て苦痛で長くは続かなかった。

せめてと思つてやつた居酒屋のアルバイトだって、仕事はできても仲間になじめないから居場所がなくなってやめた。

自分自身でそれがよくわかっていたからこそ、選択した会社だ。

企業やタレントのホームページ制作や、メールマガジン代行配信を担うこの会社に見学に来た時に、天職だと感じた。

一人一人の席が高い仕切りで囲われていて、立っても隣の席を覗き込めないくらい。

例えていうならば、漫画喫茶のような造りになっている。

朝礼や指示もほぼメールでのやり取りとなり、顧客先との打ち合わせは営業部を独立させたグループ会社が全て対応してくれる。

学生時代趣味で学んだHTMLやCSSもすぐ最新になるし、ほぼ独学から始めたIllustratorやPhotoshopの勉強に土日は費やしたけれど、充実した日々を送っていた。

それから三年の月日が流れた。

両親に煙たがれながらも実家暮らしを続け、土日はパソコンに向かい部屋から出ない日々。

たまに社長の趣味でバーベキューやダーツに参加することはあっても、社員同士の交流はない人が多く浮いた存在にはならなかった。んだ。

何より、朝早くから終電まで働いたかいがあつて、会社にも必要とされる人材なのだと自信が持てて来た。

先輩は独立する人も多かったけれど、独立すれば顧客との直接のやり取りが必要になる。

僕はきつとここですつと働き続けるのだろつ、そう覚悟していた矢先だつた。

新規事業立ち上げメンバーへの抜擢。

果たからみたら、出世コースだし、もし失敗したとしても独立するならばいい勉強になる良い話だ。

でも僕には納得行かなかった。

この人選をした社長は、僕が集団行動が苦手なことをよく知っているはずなのに。

社長室という名のただ雇がっただけの囲いの中に呼ばれる。

「田口くん」

いつもバーベキューとダーツのことしか頭にない社長にかしこまつて呼ばれる。

「いい機会だと思つんだ。君の働き振りには目を見張るものがある。ただ今はうちと似たような会社が乱立し、受注が減つて来ている。これからは通販代行も視野に入れなくてはいけない。新しい通販システムの仕組みをつくってもらいたいんだ」

「でもそれって僕だけじゃなくてチームをつくつて取り組むんですよ」

チームという言葉強調する。若干ながら嫌味を込めたつもりだつた。

社長は、やっぱり来たかという感じで笑つと、一枚のDMを渡して来た。

ビジネスセミナー「集団コミュニケーション力を磨く」【開催のお

知らせ】

「この会社はね、いろいろ面白いビジネスセミナーを企画すること
で有名だね。私とはこの会社を立ち上げる前からの付き合いだ。田
口くんにピッタリだと思うんだよ。十時からの回で構わないから是
非参加してみてくれ」

出来るだけ、萎えないようにするためだろう、軽い感じでいつて
くれるが、すでに僕には拒否反応が顔に出るのを抑えられなかった。
「大丈夫、大丈夫。無理難題をふっかけられるようなことはないよ。
この会社だって途中で辞められたり、今後の参加が減るのは困るだ
ろうから、そこら辺はよく考えていてくれるよ」

乗り気になる事は絶対不可能だったが、元々新しいことに挑戦す
ることは嫌いじゃない。

ただ途中でコミュニケーション不足が露呈してていづらくなるだ
けで。

十二回我慢すればいいだけだ、
それに今後の新規事業立ち上げチームに入る時のストレスが少し
でもなくなるかもしれないとの期待もあった。

うちの会社が潰れるのは困るし、システムの仕組みさえ造ってし
まえば、また元通りの日常に戻るのだ。

そうだ、もっと直接人とコミュニケーションを取らずとしても受
注から納品までをやり取りできる仕組み自体を自分で造ってしまえ
ばいいのだ。

「わかりました。ありがとうございます」

でた声は、自分が思っていたよりも明るかった。

2 / 五人の仲間

綺麗で近代的なビルの、オープンな受付から中に入る。

セミナー会場までの道順が紙に貼られていて、誰とも会わずに目的の会議室まで辿り付いた。

空いたままの入り口から中を覗くと、すでに数名が席について資料に目を通していている。

前の方を向くと、黒板の前で講師と思われる女性が資料の準備をしていた。

「失礼します」と言っただけで中に入るが、参加者の一人がこちらを振り返っただけで、講師は気付かない。

そのまま資料の置いてある席につこうか悩んで、思い直した。

これは集団行動コミュニケーション力を磨くセミナーなのだ。

前に言っただけで「よろしくお願いします」と、声をかけると一旦驚いたようにこちらを見たが、すぐに笑顔をつくる。

「よろしくお願いします。資料の置いてある席についてください。

あと一人来たら始めますからね」

おそらく三十代半ばといったところだろう。

少し若作りが痛々しいところもあるが、バッチリと決めた濃い化粧と、細身のスーツには隠しきれなくなったふくよかな丸みが悪い魅力的な女性だった。

席について少しすると、後ろの方で人の気配がする。

それを確認すると講師は「これで全員、五名ですね。揃いました。講師の関根です。よろしくお願いします」と挨拶する。

そう言えば前に参加した、最新webトレンドを学ぶセミナーでは、一緒に参加した社長も講師に挨拶などせず席についていたの思ひだして、先ほどの行為が恥ずかしくなる。

思った以上にセミナーは淡々と進んでいく。

一つずつの項目で、講師は誰かしらに意見を求めたが、それは全て順番にあてていたので、心の準備をすることができて苦痛にはならなかった。

何より驚いたのが、他の参加者四名の意見が全て自分の意見とほぼ同じ考えだったのだ。

それは建て前と言ってる場合の意見だとしても、本音で言っている場合だとしても。

やはり同じ悩みを持っている人間の集まりなのだから、同じ思考なのかもしれない。

別に僕だって人間が嫌いじゃなければいい。

ただコミュニケーションがうまく取れなくて、苦手意識をもってしまうだけで。

ここにいる参加者たちとは、うまくいけば仲良くなれそう気まですてきていた。

最初は余所余所しかった参加者たちも、回を重ねればさすがに世間話や参加のきっかけなどの話ぐらいはするようになる。

五名という限られた人数も丁度良くて、自然と発言の回数も増えるのだった。

特に『大久保』という年長の男性が、リーダーシップを発揮してくれて、場を作ってくれる。

彼もコミュニケーション不足が悩みと話していたが、少人数であれば話せるタイプなのだという。

彼なりの一番のコミュニケーションの方法なのだろう。

テレビで見た芸能人や会社の人間の悪口、最近起きた許せないことや嫌なことを話してくれるのだが、共感できて思わず話が弾むのだった。

いつしかこの五名誰かの身に起きた嫌な事は、話を聞いているう

ちにまるで自分の身に起きたかのようにさえ感じ、同じ様に怒っている自分がいた。

また僕の話にも、まるで自分の事の様に怒りを感じてくれるのが、とてつもなく嬉しかった。

3・人生最大の屈辱（前書き）

人数の間違いに気付き若干訂正。

3・人生最大の屈辱

日に何度の舌打ちをするのだろう。

今まで何とも思っていなかったことでさえ、あのセミナーに参加するようになってから敏感になっっている気がする。

満員電車の中で、隣のOLがよろけてぶつかる。舌打ち。

電車がいつも二分の送れ。舌打ち。

電子定期が一回のタッチで通れない。舌打ち。

コンビ二のレジのおばさんの動きが遅い。舌打ち。

パソコンの再起動を余儀なくされる。舌打ち。

コーヒーを入れたのを忘れていてぬるくなっている。舌打ち。

朝から頭にあった唐揚げが買いにいった売り切れ。舌打ち。

それから……、それから……。

早く水曜日にならないかと思う。

そうしたらこのイライラを皆に爆発させて、共感してもらおう。

あの気持ちの良い瞬間を望んでいる。

楽しみが目前に迫った火曜日の夜、僕は珍しく会社の上司に飲み
に誘われた。

いつも細かく注文をつけてくるクライアントが、僕の納品に一度
でOKをだした。

誰かの仕事を手伝おうかとメールをだし、席を立った時だから断
れなかったのだ。

普段食べないイタリアンの店を予約したというのにも心惹かれた。
友達のいない僕にとって、外食と言えば牛丼屋かラーメン。

適当に相槌うつてタダメシを食うのに集中し、会話は他の同僚に
任せてしまえばいい。

けれどそう甘くはなかった。

通された席には、三人の女性が待っていた。

合コンだ！すぐに気付いて真っ青になり、上司の鈴木マネージャーの顔を見る。

この人は確か早婚で高校生の娘がいるはずだ。
まさかこんな騙され方をするものとは思わなかったのだ。
確かに前から僕に彼女がいるかしつこく聞く所があつて、うまくはぐらかいているつもりだったのに。
癖になっている舌打ちをすんでの所で抑える。

取り合えず、自己紹介と意味のない雑談をこなしながら、次々に運ばれてくる料理をたべることにした。

鈴木マネージャーは盛り上げようとしているのだが、女性のノリはあまり良くない。

僕にとつてはそれは救いだった。

この調子なら二時間を超えた辺りで、自然とお開きになるだろう。だがそれを察知していた鈴木マネージャーが、そのまま終わるわけはなかった。

当初、あの芸能人やタレントのホームページを作っているのは俺なんだよと必死にアピールしていたが、食いつかれず、僕に話しの矛先を向けて来たのだ。

「そついえば田口はそんな仕事を真面目にやり過ぎてて、こいつ…
…未だに女性と付き合ったことないんだぜ」

僕は弾かれたように、料理を見つめていた顔をあげる。
それまでリアクションの薄かった女性たちが食い付く。

「うそー、まじで？」「えー？それって…」「本当ですかあ」
少し、恥じらうように見せながら、明らかにバカにした興味を見せる。

「ようするに童貞くんってこと！だよな、田口！」
うるさい、ほっとしてくれ。

「誰か、ボランティアで、こいつの初めてもらってくれよ」

「えー？やだあ、ちょっと」「あんたもらってあげなよ」「えー

「ちょっと無理」

僕にはその状況を冗談などいつて返せるわけもない。

それでも容赦はない。

「じゃあ、ここで究極の選択。俺実は高校生の娘いるのに、合コンきてる最低やろうだけど。一晩過ぐすなら、どっちがマシ？」

「えー？どっちも結構あれだけど、でも鈴木さんかなあ」「申し訳ないんだけど、初めての子はちょっとねえ」「うーん、私も鈴木さん！」

「だよねえ！そうだよねえ」

ご機嫌に笑う鈴木マネージャーの声を聞きながら、僕は人生最大の屈辱を感じながらとにかくその場を堪えるしかなかった。

4・爆発する感情（前書き）

人数の間違いに気付き若干訂正。セミナー参加者は五名。僕（田口）
、天堂、大久保、あと二名ですね。

4・爆発する感情

翌日のセミナーに僕は虚ろな表情で参加する。

昨日寝ないで考えてみても、僕は絶対に許せなかった。

消化も出来なかった。

いつもセミナー前に会社によってメールチェックをしてからくるのが日課だけれど、それもしていない。

鈴木マネージャーはケロリとした顔をして接するだろうか、それとも言いふらしたり、からかってきたりするのだろうか。

どちらの場合も何度もベッドの上でシュミレーションしたが、許せない。

発言も乏しく落ち込んだ様子の僕に、セミナー仲間は終わったあと、休憩室で話そうと声を掛けてくれた。

十三時過ぎ、お昼のラッシュを過ぎて誰もいない休憩室に違う会社に勤める仲間が五人集まる。

正直こんな惨めな話などしたくはなかった。

でも皆いつも『ブスに痴漢に間違われた』とか『社員旅行に最初から参加しないものとされていた』とか『好意を寄せていた女性にストーカー扱いされた』とか『飲み会で一発芸をさせられて笑い者になった』などと、かつこ悪い愚痴でも聞かせてくれる。

今度は僕の番だった。

「最低やろうだね」

年長者の大久保さんが、心からと言った感じで、忌々し気に吐き捨てる。

他の三人も、僕が言って欲しいことを言ってくれる。

いつもならそれで怒りは納まり、気分が少しは晴れるのだが、今日ばかりはそうは行かなかった。

昨日以上のドス黒い感情がまた沸き起こる。

今の僕は今にでも人を殺すような目をしているかも知れない。

このセミナーにくる前は嫌な事があると、死んでしまおうかという方向に思考が傾いた。

でも今は人に向けた殺意になっている。

僕は成長したのだろうか、それとも……？

僕の怒りが鎮まらないのは誰が見ても明らかだった。

そんな中、仲間の一人の『天堂』さんが、僕の心を見透かしたように言った。

「田口さん、その口くでもない上司を殺したいと思うでしょ？」と。絶対にしてはいけないこと、それに絶対にする勇気もないこと。でも僕は天堂さんの言う通りに、思わずにはいられなかった。

「それってごく普通の感情だと思うよ」

大久保さんが、優しい声でフォローしてくれる。

「表に出しちゃいけないって思わないで。普通の感情を持った人間なら、当たり前的事だよ」

その言葉に、僕は昨日からずっと昂っていたままの感情を爆発させるように、皆の前で泣いた。

それを見て皆は口々に言う。

「田口さんは、おかしくなんかないよ。当然だよ。そんなやつ殺されて当然だ」

「僕だつて殺してやりたいと思ったやつなんてたくさんいるよ。その上司もそれに値する」

「殺されたって文句は言えないくらい、酷いやつだね。俺だったら殺してるかも知れない」

元気づけようと言ってくれているのでも、嬉しい。

そんな中、天堂さんがポツリと言った言葉が忘れられずに頭に残り、何度も頭の中で繰り返された。

「その最低やろう、高校生の娘がいるんだっけ？その女どうにかさ

れたら、その上司を一番傷つけることができるだろうね」

その日僕は仕事にいなかった。

入社三年で、初めてのだった。

その日僕は家にも帰らなかった。

産まれてきて二十五年、これも初めてのことだった。

携帯電話は常になっていたけど、僕はディスプレイを確認する
ことさえしなかった。

5・胸騒ぎ

漫画喫茶で朝を迎える。

少しだけだけ寝ることができたお陰で、冷静さを取り戻せた。

ああ、怖いけれど携帯をチェックしなければいけない。

昨日は思わず無断欠勤をしてしまった。

けれどあの会社にしか僕の居場所はない。

なんだかんだで三年も勤めている会社なのだ。

職を失えばきつと僕はひきこもりになり、完全に社会から閉ざされるだろう。

ストレスを負ったとしても、必要とされる、且つしなければいけないことがあるというのは素敵なことだった。

まず社長室に直行して謝ろう。

それまでに何か良い言い訳を考えておかなければ。

恐る恐る携帯を開く。

予想に反して着信数は、ほぼ母からのものばかりで、会社からは、夕方に一件あるだけだった。

普段メールでのやり取りが中心になるのだから、当然なのかも知れない。

次にメールを見る。

新規受信数は、二十二件。

覚悟を決めて、一番最新の受信メールを見て、僕は驚愕した。

セミナー仲間の天堂さんから送られてきたメールには、少し顔立ちが濃いがまるでハーフのような綺麗な少女の写真が添付されていた。

その下に小さく「見つけたよ」の文字。

それだけで充分過ぎるほどだ。

これはきつと鈴木マネージャーの娘なのだろう。

確か奥さんは沖縄の人だと聞いていたし、娘さんを見たことのある人はハーフのような美少女だったと言っていたのを聞いたことがあるからだ。

一体この短い時間でどうやって調べたのだ。

全身から嫌な汗が吹き出す。

昨日の天堂さんの言葉がこだまする。

これは何だろう。

僕に昨日の言っていた戯言を実行しろというのか、それとも彼が実行してしまうのではないか。

ただの知り合ったばかりのセミナー仲間にそこまでするとは思えない。

けれど写真を見つけてきた時点で現実にはならないとも限らない。僕はすぐに天堂さんに連絡をとると、昼に喫茶店にくるように指示をされた。

仕方ない、今日も会社を休みしかない。

僕は始業時間直前に社長の携帯に直に電話する、驚いているいろいろ聞こえてくる社長を制して、一方的に謝り今日も休みを頂くが、必ず復帰すると伝えて電話を切った。

昨日と同じスーツにネクタイで喫茶店に向かう。

耳の遠い年老いた夫婦が経営する、とても小さな喫茶店は既に数人の先客で埋まっていた。

よく見ると天堂さん以外、大久保さん他三人のセミナー仲間もいる。

「仕事は？どうしたんですか！？」

思った疑問をそのままぶつけた。

「何言ってるんだよ。昨日の田口さんを見ていてじっとしていられるわけがないじゃないか」

年長者でリーダー的存在になっている大久保さんが、何がおかしいんだという顔をして言う。

「でも……だつて！」

僕は廻らない口にヤキモキしながら、ケーキを口に運ぼうとしている天堂さんの手を止める。

「天堂さん！あれは……あのメールは？あの写真はどうしたんですか？」

僕の制止ものともせず、天堂さんはゆっくりとケーキを頬ばると、フォークを僕に向けた。

「田口さん、わかっているでしょう？昨日俺が言った通りのことを実行するんだよ。もう用意はしてある」

わかっているでしょう、と言っても何のことかわからない。

いや、わかりたくはない。

「僕達は仲間だ。田口さんの怒りは、僕達皆の怒りだよ」

大久保さんは、「さあ、行こうか」そう言っ立ち上がりながら、喫茶店ごしに一軒の住宅を見ていた。

6・支配

ごく普通の一軒屋に、男五人で当たり前のように入る。

玄関を素通りし、庭から大きな窓に近づく。

歩きたびに、庭に敷き詰められた砂利を踏んで大きな音を立てていたが、誰も気にしない。

堂々とした態度が、少し不安を解消させる。

僕はもしかしたらこれが鈴木マネージャーの家で、今から侵入しようとしているのだと思っていたからだ。

でもそれなら、もつと静かに忍び寄るものだろう。

砂利の音も、咳払いも気にしない、堂々して……。

しかし、中に入った瞬間の光景に僕は声をあげそうになり、大久保さんに口を塞がれた。

広いリビングの、大きなソファアの上で朝送られてきた写真と同じ濃い顔立ちの美少女が、縛られタオルで口を塞がれていたからだ。死んではない。グツタリした様子で横たわっている。

目を必要以上に瞬きして、説明を求める。

いったいこれはどういうことなのか。

「最高のシチュエーションでしょう」

天堂さんが、薄気味悪い笑みを浮かべながら、僕の目の前に何かをかざす。

それは鈴木マネージャーと奥さんと、それからそこに縛られて横たわっている少女三人で写った家族写真だった。

「田口さんは、本当に酷いことをされた。許せないのは、仲間の俺たちだって一緒だよ」

他の人たちも決心した様な重い顔でうなづく。

「さあ」大久保さんが、僕の口を塞いでいた手を放して、ポンっと背中を押した。

軽くよろめきながら、縛られた少女のソファ―に手を掛ける。

短過ぎるスカートから覗く、適度に焼けた長く細い足に目が釘付になる。

不規則に上下する可憐な胸元を、生唾を呑み込んで眺める。

可哀想なくらい泣き腫らして怯えた目が、僕に無言で訴え掛けている。

ほんの少し足に僕の身体が当たっただけで、少女はうめき声をあげて、行き場の無いソファ―の上を縛られた身体で必死に後ずさる。「あの最低やろうの娘だよ。どうなったって構いやしないさ。当然だよ」

頭の中に、あの日の屈辱が沸き起こる。

盛り上がらない合コンで、僕の女性経験がないことを暴露した鈴木マナージャー。

年下の女性たちに、嫌悪感丸出しのバカにされたような目を向けられたときのこと。

何も言えない僕に容赦のない究極の質問とやらをだして、さらに追い詰めたこと。

鈴木マナージャーと女性たちの完全なる上から見下した笑い声。

いつ終わるともしれない、あの地獄のような時間。

元から無いようなプライドさえ、ギダギダに傷つけた。

「きつと、このままじゃ一生悩む。きつと許せないままだと思うよ。だから終わらせなきゃ」

大久保さんの言葉に僕は「そうですね」と頷いた。

初めて触る女性の太ももは、恐怖に震えていたけれど、柔らかくて手に吸い付く。

下からゆっくりとまで上げ、スカートの中に手を入れる。

逃げ場の無いソファ―の上で、尚も逃げ回ろうとする少女を僕は無理矢理押さえつけて、そのままシャツを引き裂いた。

「ひっ！！」タオルの隙間から声にならない少女の悲鳴がきこえる。僕はそれに満足する。

どうにもならないと思っていた。

でも今は女性の上に立っている、自分次第でこの少女はどうにでもなる。

心地よい支配感が身体中を駆け巡る。

「僕はやれるんだよ」

そう少女の耳元で囁き、恐怖を煽ってから、僕は抵抗の出来ない少女の胸元に舌を這わした。

7・団結する仲間達

僕には仲間がいる。

僕の苦しみを同じように分かち合ってくれる。

僕のために身体を張ってくれる。

あの瞬間は最高だった。

全てが終わった後に帰ってきた、鈴木マネージャー。

自分の娘の変わり果てた姿に声も上げられずに泣き崩れる。

仲間に縛られ、口を塞がれても抵抗も出来ない程のショックだったようだ。

そんな鈴木マネージャーの眼を見て、僕は言った。

「ありがとうございます。僕はもう童貞ではありません」と。

大久保さんが用意してくれた車に、既に殺されていた奥さんと、僕が絶頂を迎える時に首を絞めて殺した娘と並べて運ぶ。

鈴木マネージャーは、可哀想なくらいガクガクと震えていたけれど、残念だがここでお別れだ。

ここからは、山中に死体埋めるチームと、この部屋から証拠を隠滅するチームの二手に分かれるからだ。

夜を越え、朝日が外を照らす頃、天堂さんから連絡が入る。

「こっちは任務完了だよ」と頼もしい声。

それを伝えると大久保さんは、僕の体液が残るソファに灯油を注ぎ火をつけた。

充分に離れた場所で立ち昇る炎と、消防車のサイレンを聞きながら、僕は決心した。

ここまでしてくれた仲間が、今度僕と同じ様な嫌な目にあったら、

何でもしてやろうと。

それから僕達五人は、力を合わせて人を殺した。

電車で痴漢扱いをしてきた勘違いも甚だしいブスな女

社員旅行に最初から参加しないものと決めつけた同僚

その気のあるフリをしないと本気になったらストーカー扱いして
きた女

飲み会で一発芸をさせられて笑い者にさせた後輩

それから……それから……

エピソード

その日セミナーは最終日を迎えていた。
長いと思った三ヶ月はいろいろな事があり過ぎてあつと言つ間だった。

僕達五人は、このセミナーで得た事を発表した。
もちろん、殺人をしていることは伏せて。
仲間と別れるのは寂しいけれど、究極の秘密を共有したこの五人の絆は永遠だろう。

今なら新規事業立ち上げチームにも馴染めるはず。
一番良い集団コミュニケーションの取り方を僕は学んだのだから。

「それでは最後に講師から挨拶です」
関根講師が、改まって咳払いをする。

そう言えばこの人を殺したいって誰も言わなかったなんて、ふと思う。

確かに良い人だった。

僕達の悩みをわかってくれて、最後まで無理を言わなかった。
後半、皆で殺害計画を練っている時期などは、そつと自由時間を与えてくれた。

でも講師という立場だ。

三ヶ月という期間で、誰かに嫌われても不思議ではない。
何か違和感を感じた時、ガタッとイスから立ち上がる音が聞こえた。

僕の脇をすり抜けて、大久保さんと天堂さんが、関根講師の横に立つ。

呆氣にとられる僕を含めた残りの三人を見て、関根講師は笑って言った。

「ー皆さん、憶えてましたか？最初の案内に講師は三人と書かれていた事を。」

改めて紹介します。大久保講師と、天堂講師です。

この二人がセミナー参加者として、一緒にセミナーを受ける事で、皆さんは学んだ事も多かったでしょう。

次はあなたちが第二回集団コミュニケーション力を磨くの、講師になってもらいましょう。

エピローグ（後書き）

これで完結です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9966m/>

ビジネスセミナー

2011年1月18日22時25分発行